



## 著者プロフィール

山尾玉藻（やまお・たまも）

昭和19年 大阪市生まれ 岡本圭岳・差知子の長女

昭和58年 「火星」同人

昭和64年 「火星」副主宰

平成7年 「火星」主宰

句集に『唄ひとつ』（平成2年、本阿弥書店）、『鴨鍋のさめて』（平成8年、本阿弥書店）、『自註 山尾玉藻集』（平成14年、俳人協会）、『かはほり』（平成18年、ふらんす堂）。

「火星」主宰。公益社団法人俳人協会幹事。大阪俳人クラブ常任理事。日本文藝家協会会員。

〈句集『人の香』より転載〉〈2015年12月10日時点〉

## 『人の香』（自選15句）

山尾玉藻

雛の日の日さしに零れ松の塵  
寒戻りけり水底のごはん粒  
菖蒲田のかつと照る日を家にある  
天牛のとんだる空のまだそこに  
とのくもる草刈に音出できたり  
葉書数枚書きなにかなし冬籠  
かはせみの失せたる杭も初景色  
応へねばならぬ扇をつかひけり  
夜の川に沿うてゆきたる熊手かな  
大原女の手甲に蝶の生まれけり  
遺されし貌が鏡に鴨のこゑ  
夫覚ますごとく煮凝揺らしけり  
始まりの終りのなくて蓮枯るる  
どの雲となく水となく端午かな  
人の香に身をほときけり秋の蛇